

■ 研究動向

「家事労働」概念の再検討

—— 英国エセックス大学大学院におけるセミナーから ——

大和礼子

筆者は1997年8月から1998年9月まで、イギリスのエセックス (Essex) 大学社会学部⁽¹⁾で在外研修を行った。修士コースの学生と一緒にコースワークを行ったため、イギリスの家族・ジェンダー研究の動向全般を見渡すことはできなかったが、当地での大学院教育をごく一部ではあるが体験することができた。一方、筆者はここ数年来、共同研究者たちと家事についての調査研究を行ってきた(山根・斧出・藤田・大和, 1997)。そこでエセックス大学では、家事研究に焦点を当ててセミナーに参加した。この経験から、家事についての研究をさらに進める上で筆者が重要だと感じたことを、以下で報告したい。

1. 家事＝「女性に押しつけられた無償の再生産労働」？

筆者は Milliam Glucksmann, Catharin Hall, Leonard Davidoff などのセミナーに参加した。これらの顔ぶれからも分かるように、セミナーでは家事を歴史的視点およびポスト・コロニアリズム (post colonialism)⁽²⁾の視点から取り上げることが多かった。その中で、筆者がこれまで用いてきた枠組みに再考を迫るような、家事に対するアプローチに出会い、新鮮な興味を覚えた。従来用いていた枠組みとは、オークレー (Oakley, 1974=1980) やマルクス主義フェミニストたちの家事労働についての捉え方⁽³⁾に沿ったものであり、家事を「女性に押しつけられた無償の再生産労働」と見るものである。この枠組みにおいては、家事の再生産労働としての側面、ジェンダーという分割線、そしてその無償性がとくに強調され、それ以外の側面は相対的に等閑視される傾向があった。セミナーで交わされた議論から筆者が感じたのは、その等閑視されている諸側面を家事労働概念の中に取り込む必要性である。そしてそのための戦略として、家事を普遍主義的に捉える(たとえば、あらゆる資本主義社会において普遍的な女性抑圧の手段としての家事、といった捉え方)だけではなく、歴史的・社会的な特殊性をもつものとして捉えることの必要性である。たとえば Catharin Hall や Leonard Davidoff のセミナーでは、ヴィクトリア・エドワード朝時代の大英帝国という社会・歴史的状況において、家事は具体的にどのように行われ、それは社会の他の諸側面に対してどのような意味を持っていたのかという視点から、家事に対してアプローチされていた。この時代の家事研究において戦略的に重要な位置を占めるのが、家事使用人 (domestic servant) である。家事使用人という歴史的存在に注目することによって、家事を「女性に押しつけられた無償の再生産労働」としてのみ概念化することの限界が、明らかになるのである。

2. 家事労働の文化的意味——「社会的境界とアイデンティティ」を生産する労働

イングランドでは、19世紀中頃から20世紀はじめにかけて、女性労働力人口のうちもっとも多くの割合を占めていたのが家事使用人だった。その数は、1851年には約75万人、最も多かった1891年には約140万人に達し、100万人を割りこんだのは1930年代も終わりになってからである (Davidoff, 1995)。この時期なぜ家事使用人がこれほど必要とされたのか。それは中産階級 (middle class) にふさわしいライフスタイルを維持するためには、家事使用人による労働が必要不可欠だったからである (Higgs, 1986 ; Davidoff, 1995 ; McClintock, 1995)。19世紀のイングランドは市場経済の急速な発展によってそれ以前の階層構造が崩壊しはじめた時期である。商工業から得た富によって自らの権力を主張しはじめた人々は、一方で伝統的貴族階級による支配に挑戦するとともに、もう一方で自分たちより貧しい人々と自分たちとの間の階級差を作りだそうとしていた。しかし中産階級であるということは、血筋や称号などによって示されるものではない。そこで彼らはライフスタイルや行動様式によって他の階級と自分たちとを区別しようとした。家庭生活のあり方——たとえばきれいにしつめられた住宅やインテリア、清潔さ、秩序だった家庭生活、そして労働しない妻や娘——は、中産階級が自らを他と差異化するための重要な標識の一つであった。しかし、このように美しく整えられた家庭生活と、家族が肉体労働をしないことは、相互に矛盾する要請である。この矛盾を解消するために用いられたのが家事使用人であった。女主人は居室にすわって家政を管理し、その一方で、料理、掃除、洗濯、乳幼児の世話など「よごれもの」を扱う労働はできる限り家事使用人に行なわせようとした。まさに家事使用人の労働によって、清潔なシーツ、ちり一つない部屋、複数の皿に分けて順にだされる食事、美しく身支度した妻や子供たちといった中産階級の暮らしが実現されたのである (Davidoff, 1995)。

このような歴史的事実は、家事労働に対する次のような捉え方に再考を迫るものである。まず第一に、マルクス主義に影響を受けたフェミニズムの立場からは、家事労働は、労働者階級の女性による労働者階級自身の労働力を再生産するための労働であると捉えられてきた (Molyneux, 1979)。それに対して、家事使用人の家事労働は、労働者階級の女性による⁽⁴⁾、中産階級の身体を再生産する労働だといえる。この点については、次の項で詳しく論じたい。

第二に、家事使用人の労働は、中産階級の身体を再生産したばかりでなく、中産階級のライフスタイルやアイデンティティといった文化的側面をも形成し、中産階級と労働者階級との間の境界線そのものを生み出したともいえる (Davidoff, 1995 ; McClintock, 1995)。中産階級の人々は、家事使用人によって実現された上記のような家庭生活を楽しむことによって、そして自らはそのような「よごれもの」を扱う労働をしないことによって、自らとより低い階級との間の差異と、自らの中産階級というアイデンティティを確認していたのである。確かに、家事労働をアイデンティティの形成との関係で見ると、以前からあった。たとえば梅棹 (1959) は家事労働と妻としてのアイデンティティとの関連について、また山田 (1998) は家事労働と女性としてのアイデンティティとの関連について、それぞれ論じている。しかし、これらに加えて、家事労働と階級・階層的アイデンティティとの結びつきについて再考する必要があるのではないか。たとえば、近年の日本における、家庭のインテリア、料理、清潔などに対する熱心さは、純粋に身体的再生産のためのものというより、それ以上の何かを含んでいる。これをジェンダー・アイデンティティとの関連のみではなく、女性とその家族の階層的アイデンティティとの

関連で捉える必要があるのではないか。しかも、ヴィクトリア・エドワード朝時代のイングランドでは、家事労働をしないことと中産階級のアイデンティティとが結びついていたが、現代の日本ではどうなのだろう。そして明治、大正、昭和戦前期ではどうだったのだろう。どのような家事をすること、そしてどのような家事をしないでその結果のみを享受することが、より高い階層意識と結びついていたのだろうか、そしてしているのだろうか。

以上から、家事労働を、身体的再生産のための労働としてのみならず、「社会的境界を生産・再生産するための労働」(Davidoff, 1995)として概念化する必要があるということを中心を主張したい。社会的境界には、ジェンダー、階級・階層などのほか、様々なものがありうる。民族的多様性が高まった社会においては、エスニシティという境界も含まれるだろう。

3. 家事の階級間分業・エスニシティ間分業

前項で見たように、ヴィクトリア・エドワード朝時代のイングランドでは、家事は中産階級のレディの仕事とは考えられていなかった。もちろんひとくちに中産階級といっても多様であり、熟練しかつ専門化した家事使用人が何人もいる階層から、十代の家事見習的な少女を何でも屋としてやっと雇える階層まで様々であった。後者の場合には、女主人も実際にはかなりの量の家事をしていたが、家族の外の人々に対しては、中産階級としての体面を保つために、家事などあたかもしていないかのように振舞わなければならなかった。

すなわちここには、家事労働のジェンダー間分業だけでなく、階級間分業が存在するのである。しかもこの階級間分業は、エスニシティ間分業と重なっている。移住先の言葉が不自由な移民労働者が、特別な技術なしにまず得ることができるのは、家事使用人としての職だったのである。産業化がさらに進み、大都市以外でも女子の工場やオフィス労働の機会が広がると、家事使用人の不足という問題が起こる。中産階級は様々な方法で家事使用人を確保しようとしたが、功を奏さず、第二次大戦後には、家事の戦後体制——階級に関わりなく家事は家族の女性が行なう——が広がり、われわれがよく知っている家事のジェンダー間分業があらわになる。しかし家庭の外に目を転じれば、かつて家庭で行われていた労働が外部化され、そしてその外部化された労働をめぐる階級・エスニシティ間分業が相変わらず存在した。つまり食品工場で労働者階級・移民の女性が家庭用食品を作り、それを労働者階級・移民そして中産階級の女性が購入する、また家庭用電化製品の工場で労働者階級・移民の女性がそれを作り、中産階級がそれを買う（後には労働者階級や移民の家族も買うようになった）、ということが見られたのである (Glucksmann, 1990)。さらにイギリスでは1980年代になると、共働きの中産階級の家庭でベビー・シッターやハウス・クリーニング・サービスを雇うことが増え始め、家庭領域内での家事の階級・エスニシティ間分業が再び現れようとしている。

日本においても、家事の外部化や商品化を問題にする場合には、ジェンダー間分業という視点だけではなく、ジェンダー間分業と階層間分業との絡み合いという視点を取り入れる必要があると思われる。ベビー・シッターやハウス・クリーニング・サービスは今のところそれほど一般化していないかもしれない。しかし、家庭用加工食品工場での労働と家庭内での家事とは関連付けて考える必要があるだろうし、そのためにはジェンダー間分業と階層間分業を絡み合わせて考察するという視点は不可欠であろう。

4. 無償の家事労働の「見返り」とその社会的文脈

オークレーやマルクス主義フェミニストたちは家事は「無償労働」だと論じた (Oakley, 1974=1980; Dalla Costa and James, 1980; Molyneux, 1979)。そしてC. デルフィは、家事労働が無償なのは、その労働内容によるのではなく、それが行なわれる社会関係のゆえにそうなのだと論じた (Delphy, 1984)。したがって、家事使用人が雇われ先の家庭で行なう労働は (たとえそれがどんなに不当に安いものであったとしても) 有償であり、主婦が自分の家庭で行なう労働は無償なのである。筆者もこれらの議論に異議はない。しかし、そのような「無償の家事労働」が、どうして日本社会では、いまだに合理化されず労働集約的に、しかも圧倒的に女性のみによって行なわれているのか。現代日本の主婦たちは、一部を除き、家事労働に対する異議申立てをそれほど強く表明してはいないし、完全な平等分担を求めてもいない (大和, 近刊)。日本の主婦は時代遅れになりつつあるジェンダー・イデオロギーに縛られている愚かな存在だからなのか。これを考察するために、次のような問いを設定してみたい。すなわち、たとえばアメリカ社会における「無償の家事労働」と日本社会における「無償の家事労働」は、そのような労働を行なっている人と同じ帰結をもたらすのか。「無償の家事労働」を、社会的文脈を超えて普遍的なものとして扱っていいのか。家事使用人に関連した話からは少しずれるが、最後にこの問題について論じたい。結論を先に言えば、「無償の家事労働」の実際の意義は、それがおかれた社会制度のあり方 (結婚・雇用・社会保障など) によって異なるというのが筆者の主張である。

これを考えるために、たとえば次のような社会をイメージしてみよう。——結婚においては性的情熱やロマンティックな愛情が重視され、離婚は破綻主義に基づく。したがって結婚は不安定である。男性が妻を養わなければならないという規範の拘束力は弱まっており、それは男らしさや市民としての義務とは考えられていない。雇用や社会保障制度の単位は個人であり、女性も自分で稼ぐことが原則である——。このような社会において、家事労働が無償ならば、それを行なう人の生活保障という点からは、家事は文字どおり何の見返りもないただ働きであり、女性のみが担わなければならないとしたら、それは不当な重荷以外の何ものでもない。

それに対してもう一つ、次のような社会をイメージしてみよう。——結婚は性別分業に基づく実際の協力関係 (夫は稼ぎ、妻は家事を行なう) が重視され、離婚はそのような協力関係が壊れたときのみ当事者から求められるし、そのような場合にのみ法的・社会的に認められる。雇用や社会保障の単位はカップルであり、女性が有利な職業を持つ機会は著しく制限されている。男性が妻や子を養わなければならないという規範は、意識の上でも制度的にも強く、男性および良き市民としてのアイデンティティと強く結びついている——。このような社会では、家事労働は無償であるが、家事をすることによって女性は生活保障を事実上得ているのである。家事は単に愛他的な行動ではなく、見返りのないただ働きでもなく、またその見返りはアイデンティティに関するものにとどまらない。すなわち家事は女性にとって、それをすることによって自分自身の生活を守ることのできる実際的な手段なのである。

このような二つの社会では、同じ「無償の家事労働」でも、それを行なう意義はまったく異なっている。これまでの日本社会は、どちらかといえば後者により近いといえるだろう。「家事労働の無償性」を強調することは重要である。しかしそれにとどまらず、同じ「無償の家事労働」が、それを取り巻く

社会的文脈によってどのような違った意義を持ちうるのか。それを明らかにすることが、この項のはじめに述べた日本における家事労働の現状を理解するためには、どうしても必要なのである。

以上、エセックス大学におけるセミナーの経験から、現代日本における家事の意味を理解するためには、それを比較社会的・比較文化的・比較歴史的に捉える必要があることを指摘した。そしてそのためには、家事を普遍主義的にのみ捉えることを再考する必要、そして「女性に押しつけられた無償の再生産労働」という観点からのみ捉えることを再検討する必要があることを提案した。具体的には、①社会的境界を作るための労働としての家事、②家事の階級・階層・エスニシティ間分業、③結婚・雇用・社会保障制度などとの関連で家事の無償性を捉えること、といった視点を持つことである。このような視点を持ちつつ、家事の研究を進めていきたいと思う。

注

- (1) エセックス大学は社会学研究において非常に高い評価を得ており、スタッフ数も32名を数える。社会学の MA (修士課程) のコースは11用意されている (手元にある1996-1997年版のガイドブックによる)。筆者はその中の MA Sociology of Gender, Culture and Society というコースに参加した。
- (2) 筆者はポスト・コロニアリズムを次のように理解している。近代の欧米社会は植民地主義 (colonialism) の上に形成されており、植民地との関係が社会・文化のあらゆる側面に影を落としている。そしてその影響は植民地が解放された現在においても生き続けている。したがって近・現代の欧米社会は植民地主義をぬきにしては理解できない。以上のような前提にもとづき、植民地との関係というパースペクティブを社会理論、文学研究、文化研究をはじめとする諸研究に取り込み、既存の理論を脱構築しようとする立場。
- (3) 1970年代のイギリスにおける家事労働論争については、Molyneux (1979) を参照。
- (4) 近代初期には男性の家事使用人も多かったが、しだいに女性のそれにとって代わられた (Davidoff, 1995)。
- (5) 大和 (近刊) によると、現代日本において、夫が妻に対して情緒労働をするかしないかは、夫婦の絆に重大な差異をもたらす項目であるが、夫が炊事・掃除などの家事労働を平等に分担するか否かは、それほどの重要事項とは考えられていない。

参考文献

- 梅棹忠夫, 1959, 「妻無用論」『婦人公論』6月号 (上野千鶴子編, 1982, 『主婦論争を読む I』に所収)。
 山田昌弘, 1998, 「愛情表現としての家事? — 手作り神話は崩壊するか? —」『生活協同組合研究』273 (10月号), (財)生協総合研究所: 13-18。
 大和礼子, 近刊, 「『集団』としての家族・『組織』としての家族・『ネットワーク』としての家族」, 組織とネットワーク研究班『組織とネットワークの研究』(研究双書 第112冊) 関西大学経済・政治研究所。
 山根・斧出・藤田・大和, 1997, 『家族多様化時代における家事分業の変容可能性に関する調査研究』,

コープこうべ・生協研究機構.

- Dalla Costa, M. and James, S., 1980, "The Power of Women and the Subversion of the Community", in Malos, E. (ed.), *The Politics of Housework*, London: Allison & Busby.
- Davidoff, L., 1995, *Worlds Between: Historical Perspectives on Gender and Class*, Cambridge: Polity Press.
- Delphy, C., 1984, "The Main Enemy", in *Close to Home: A Materialist Analysis of Women's Oppression*, London: Hutchinson & Co.
- Glucksmann, M., 1990, *Women Assemble: Women Workers and the New Industries in Inter-War Britain*, London: Routledge.
- Higgs, E., 1986, "Domestic Service and Household Production", in John, A. (ed.), *Unequal Opportunities*, Oxford: Blackwell.
- McClintock, A., 1995, *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest*, London: Routledge.
- Molyneux, M., 1979, "Beyond the Domestic Labour Debate", in *New Left Review* 116: 3-27.
- Oakley, A., 1974, *The Sociology of Housework*, Oxford: Blackwell. (佐藤和枝・渡辺潤訳, 1980, 『家事の社会学』, 松籟社.)

(やまと れいこ・関西大学)